

〈論文〉

「音声」の語史

阿久津 智

要 旨

「音声」という語の語史について、文献資料（データベースやコーパスを利用）をもとに探った。その結果、次のことがわかった。(A) 現代日本語の「音声」は、《技術的に扱う音》を表すことが多い。(B) 「音声」には、奈良時代から、《(人の) 声》や《楽器の音》を表す用法があった。(C) 「音声」は、少なくとも平安時代以降、「おんじやう」と読まれたが、江戸時代に「おんせい」という読みが生まれ、明治以降、「おんせい」が一般的になった。(D) 「音声」は、明治以降、《言語音》、とくに《単位音》を表すのに使われることが多くなった。(E) 《言語音》を表す用語には、明治期に、「音韻」、「音声」、「声音」などがあったが、昭和初期以降、音韻論における音概念には主に「音韻」が、音声学における音概念には主に「音声」が使われるようになった。

キーワード：音声，声音，音韻，語史

1. はじめに

本稿では、一般に使われる語であり、言語学・音声学の専門語でもある「音声」の語史を探っていく。

「音声」を取り上げようと思った背景には、後述するように、この語には、歴史的な読み方の変化（「オンジャウ」→「オンセイ」）、日中両言語における語形（表記形）の異同（「音声」と「声音」）、辞書の第一義と実

際の主たる用法とのずれ（「言語音」と「技術的に扱う音」といったこと）が見られ、興味をひかれたということがある。

「音声」の語史の記述に当たっては、阿久津（2022c）で示した、一般語、あるいは転用語（古典漢語を採用した語）由来の専門語の語史を記述する方法をとる。具体的には、文献資料（データベースやコーパスを利用）をもとに、「音声」という語について、①一般語としての語義の変化、②一般語としての語形の変化、③専門語としての概念の起源や変遷、④専門語としての名称の由来や変化、を明らかにしていきたい。

本稿では、まず現代語における「音声」という語の意味について概観し（第2節）、ついで「音声」の語史を見ていきたい（第3節）。なお、漢字の字体は、現代日本語の通用字体を用いる。

2. 現代語における「音声」

2.1 現代日本語における「音声」の意味

国語辞典で「おんせい（音声）」をひいてみると、次のような2つの語義を載せているものが多い。

(01) おんせい【音声】 ①人が出す声。言語音。②放送などで、映像に対して）声や音。「一がとぎれる」（『岩波国語辞典 第八版』岩波書店 2019）

ほかに、例 01 の①の意味のみを挙げているもの（例 02）、例 01 の①を2分しているもの（例 03）、さらに、意味を非常に細かく分けているものなどもある（例 04）。

(02) おんせい【音声】 人の発音器官から出て、言語を形作る音。こえ。「一学・一記号」（『新明解国語辞典 第八版』三省堂 2020）

(03) おんせい【音声】 ①人間が意思を伝達するために口から発する音。言語音。②人の声。おんじょう。③おと。「テレビから—

が消える」(『大辞林 第四版』三省堂 2019)

- (04) おんせい【音声】 ①人間の声を録音したもの。「一ガイドダンス」②『映画・放送』a [映像に対して] 人間などの声や物音など。「一がとぎれる」b「音声②a」を収録する仕事(をする人)。③『言』a人がことばとして出す おと。ことばの内容を耳に伝える手段。(↔文字) bいろいろな言語や方言での区別を参考に、ことばの音をできるだけ多くの種類に分けたもの。例、「おんなじ」「おんがく」の「ん」は、それぞれ「n」と「ŋ」という別の音声。(『三省堂国語辞典 第八版』三省堂 2021)

今日の主な国語辞典における「おんせい(音声)」の意味区分をまとめると、おおよそ次のようになる(表1)。表1の「意味」のうちの「言語音」が、言語学・音声学の専門語の「音声」に当たる。

表1 国語辞典における「音声」の意味区分

辞典 発行年	意味					
	言語音	人の声	(放送の)音	収録の仕事	録音	雅楽器の音
学研現代新国語辞典(6) 2017	○		-	-	-	-
新明解国語辞典(8) 2020	○		-	-	-	-
新選国語辞典(10) 2022	○		-	-	-	-
集英社国語辞典(3) 2012	①		②	-	-	-
旺文社国語辞典(11) 2013	①		②	-	-	-
現代国語例解辞典(5) 2016	①		②	-	-	-
岩波国語辞典(8) 2019	①		②	-	-	-
明鏡国語辞典(3) 2021	①		②	-	-	-
大辞泉(2) 2012	②	①	③	-	-	-
大辞林(4) 2019	①	②	③	-	-	-
広辞苑(7) 2018	②	①		-	-	-
日本国語大辞典(2) 2000-2002	③	①	-	-	-	②
三省堂国語辞典(8) 2021	③b	③a	②a	②b	①	-

() 数字は、辞典の版。○は、各辞典における意味区分。

ここから、現行のほとんどの国語辞典は、「音声」の第一義を《人の声》や《言語音》としていることがわかる。

次に、現代日本語における「音声」の使用実態を見てみたい（以下、コーパス・データベース等の最終閲覧は2022年10月）。

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)（コーパス検索アプリケーション「中納言」を使用）で「音声」（短単位・語彙素「音声」）を検索したところ、結果は1773件であった。このうち、「レジスター」を「新聞（2001～2005）」（12件）と「雑誌（2001～2005）」（153件）に絞って用例を見てみると、ほとんどが、「音声出力」、「音声案内」、「音声認識」など、《技術的に扱う音》（例01の②に相当）を表す「音声」の例で、「人の声」や《言語音》（例01の①に相当）の例は、「曇りガラスの向こうで、音声を変えて話す。」（『京都新聞』2004/09/04）、「音声言語コミュニケーション（話しことば）」（『小五教育技術』2005年11月号）くらいしかなかった。

また、「Yahoo!知恵袋（2005）」（223件）・「Yahoo!ブログ（2008）」（119件）においても、「言葉に興味のある方・音声などに興味のある方」（「Yahoo!ブログ」）、「音声とイントネーション」（「Yahoo!ブログ」）、「音声学」2例（Yahoo!知恵袋）以外は、ほぼ《技術的に扱う音》を表す「音声」の用例しか現れなかった。

ここから、今日、「音声」という語は、日常的には、《技術的に扱う音》の意味で使われることが多いことがわかる。

2.2 現代日本語の「音声」と現代中国語の「声音」

「音声」の類義語に、「音声」の字順を逆にした「声音（せいおん）」という語がある。

(05) せいおん【声音】 こえ。音声。▷「こわね」と読めば別の意。

（『岩波国語辞典 第八版』2019）

「声音」は、現代日本語では、あまり使われない語であるが（BCCWJで「声音」（短単位・語彙素「声音」・語彙素読み「セイオン」）を検索した結果は2件であった）、中国語では、「声音 shēngyīn」が一般的に使われ、逆に、「音声 yīnshēng」はあまり使われないようである。たとえば、現代中国語の規範的な辞典である『現代漢語詞典 第7版』（商務印書館2016）には、「音声」は載っていない。つまり、「音声」と「声音」に関して、現代日本語と現代中国語とで、字順が逆転した語（字順逆転語、字順転倒語、逆字順二字漢語、鏡像語、反転語）が使われていることになる。

日中両言語間における字順逆転語の意味上の相違について分析した馬（2017: 72）は、日本語の「声音－音声」と中国語の「声音」を、「日本語の「AB・BA」ともに中国語の「AB」と意味が同じもの」の例として挙げている。

実際のところは、現代日本語の「音声」と現代中国語の「声音」とは、必ずしも同義ではなく、次のようなことがいえるようである。

- (a) 現代日本語の「音声」に比べて、現代中国語の「声音」は、はるかに使用頻度の高い、日常的な語である。
- (b) 現代日本語の専門的な意味を担う「音声」は、現代中国語の「声音」とは、必ずしも対応しない。

まず、(a) について、コーパスを利用して、両言語における「音声」と「声音」の出現件数（検索結果）を見てみると、表2のような結果になった

表2 コーパスにおける「音声」と「声音」の出現件数

言語（コーパス）	「音声」	「声音」
現代日本語（BCCWJ）	1773	2*
現代中国語（CCL）	110**	38752**

*「語彙素読み」の「セイオン」のみ、「コワネ」（214件）は含まない。

**文字列の検索のため、語としての「音声」、「声音」以外のものも含まれる。

(日本語についてはBCCWJを、中国語については「CCL 語料庫」(「現代漢語」)を利用した)。

表2からは、日本語では、「音声」が主に使われ、中国語では、「声音」が主に使われることがわかる。また、両言語のコーパスの規模が異なるため(BCCWJは約1億語(短単位)、CCL(現代漢語)は約5億8千万字)、単純には比べられないが、それでも、中国語の「声音」の使用頻度が非常に高いことがわかる。中国語の「声音」は、「(人や動物の)声、物音、響き。」(『中日辞典 第3版』小学館2016)であり、どちらかという、日本語の「声」や「音」に比すべき語のようである。試みに、『講談社日中辞典』(講談社2006)で、「おと(音)」、「おんせい(音声)」、「こえ(声)」をひいてみると、いずれも最初に「声音 shēngyīn」が挙げられている。また、BCCWJで、「声」(短単位検索・語彙素「声」・語彙素読み「コエ」)、「音」(短単位検索・語彙素「音」・語彙素読み「オト」)を検索した結果は、それぞれ、34120件、15990件で、単純に数字の桁でいえば、CCLの「声音」に近くなっている。

ところで、日本語(和語)の「音(おと)」と「声(こえ)」とは明確な意味の違いがある。これについて、『日本国語大辞典 第二版』(小学館2000-2002)(以下、『日本国語大』)に、次のようにある。

- (06) 現代語の「おと」は無生物の発するもの、「こえ」は動物など生物が主に発声器官を使って発生させている(と聞き手がとらえた)ものを表わし、無情物対有情物の対義関係にある(『日本国語大』「おと(音)」「語誌」(1))

また、日本漢語の字音語素(形態素)の「音(おん)」と「声(せい)」にも使い分けが見られる。中川(2010)は、日中両言語を比べて、次のように述べている。

- (07) 現代中国語では人間をはじめとする生物などの発する「声」と、それ以外のものが出す「音」を区別せず、ひっくるめて“声

音”というが，“拡音器”の例からも分かるように“音”のほうが生産的で、造語力が強い。日本語では、「声」と「音」の区別は厳格で、『音を遮断する壁』は「防音壁」であるが、『人間の声を拡大する』のは「拡声器」である。(中川 2010: 304)

ただし、日本語でも、人の声を言語の音声として(音声学的に)扱うときには、「声」ではなく、「単音」, 「発音」, 「鼻音」などのように、「音」を使う(阿久津 2022b: 105)。

次に、(b)「現代日本語の専門的な意味を担う「音声」は、現代中国語の「声音」とは、必ずしも対応しない」ことについて、日中辞典を用いて、現代日本語の「音声」を含む複合語(専門語)が、中国語でどう表現されるかを見てみる。

『講談社日中辞典』, 『日中辞典 第3版』に載っている、日本語の「音声」を含む複合語とその対訳語を、以下に挙げる(表3)。

表3に見られるように、日本語の「音声」は、中国語では、「語音」,

表3 日本語の「音声」を含む複合語と中国語の対訳語

日本語	中国語	
	『講談社日中辞典』	『日中辞典 第3版』
音声学	語音学	語音学
音声器官	-	発音器官
音声記号	-	発音符号/音標
音声言語	口語/口頭語言	声音語言/口頭語言
音声合成	語音合成	-
音声多重放送	多声道廣播	多重声音廣播
音声認識	語音識別	語音識別
音声ファイル	-	音頻文件
音声明瞭	-	声音明了/声音清晰
副音声	-	副音軌

「発音」, 「口頭」, 「声道」(チャンネル), 「声音」, 「音頻」(オーディオ), 「音軌」(サウンド・トラック) など, さまざまな語形で現れる。ここから, 現代日本語の「音声」が専門的な語として, 広い範囲をカバーしていることがわかる。現代中国語の「声音」が日常的な用法に傾いているのに対して, 現代日本語の「音声」は専門的な用法に傾いているといえるであろう。

3. 「音声」の語史

本節では, 「音声」という語の歴史について, ①一般語としての語義, ②一般語としての語形, ③専門語としての概念, ④専門語としての名称, の4つの面から見ていきたい。

その前に, 「音声」(「おんじょう」, 「おんせい」)の語史の大枠を知るために, 『日本国語大』から, 「おんじょう(音声)」, 「おんせい(音声)」の項を引用しておく。

- (08) おんじょう【音声】 ①人や動物の声。また, 節をつけて唱えたり歌ったりする声。おんせい。*田氏家集〔892頃〕上・山寺聴鶯「音声軟弱太嬌_レ春, 山寺聞時感更頻」*文明本節用集〔室町中〕「音声 ランジャウ」*天草本伊曾保物語〔1593〕烏と狐の事「Vonjōga (ランジャウガ) イササカ ハナゴエデ アキラカニ ナイト マウスガ」 ②「おんじょうよく(音声欲)」の略。*仮名草子・竹斎〔1621~23〕上「めんしゃう, けいじつ, せんはく, さいこつ, ゐぎ, をんじょうとて, これを六欲と申候」 ③雅楽の管弦の音。また, 楽器, 鐘などの音。音色(ねいろ)。*靈異記〔810~824〕上・五「和泉の国の海中に楽器の音声有り」*九曆-九曆抄・天曆七年〔953〕正月五日「次雅楽興_二音声_一, 二曲, 舞間出穩座」*東大寺統要録〔1281~1300頃〕「諸楽奏_二

音声—」*周礼—地官・鼓人「鼓人掌_レ教_二六鼓四金之音声_一，以節_二声樂_一，以和_二軍旅_一」（『日本国語大』）

- (09) おんせい【音声】 ①人の声。おんじょう。いんしょう。おんぞう。*歌謡・松の葉〔1703〕五・歌音声「歌の事，音声（オンセイ）ゆたかにして，始終たるまぬやうにうたふこと第一なり」*浄瑠璃・夏祭浪花鑑〔1745〕—「今様朗詠さまごまに，音声（オンセイ）微妙（みめう）を尽さん事」*滑稽本・浮世風呂〔1809～13〕四・下「瞽女（ごぜ）節をはじめとして，すべての田舎唄は濁音で音声（オンセイ）がだみてみやす」*宋玉—登徒子好色賦「寤_二春風_一兮_二發_二鮮榮_一，潔_二齊_二俟_二兮_二惠_一音声—」 ②雅楽で楽器の音をいう。音色（ねいろ）。おんじょう。 ③人間が，音声器官を使って話しことばとして発する音。言語音。*開化の入口〔1873～74〕〈横河秋濤〉下「イーヤ夫でも彼等は何処やらに臭みが有る，イーヤ舌が短かいの，音声（ランセイ）が違がってゐるのと無理に彼を隔て我身を立てるは」（『日本国語大』）

以上の記述からは，次のようなことがいえる（「おんじょう」の歴史的仮名遣いは「おん（む）じやう」であるが，文献にはさまざまな仮名遣いで現れるので，以下，「おんじやう」で代表させておく）。

- (a) [起源]「音声」という語は中国起源である。
- (b) [語義]「音声」には，主な意味として，《（人の）声》と《楽器の音》とがあり，ともに平安時代から使われている。
- (c) [語形]「音声」には，「おんじやう」と「おんせい」という語形があり，前者が古く，後者が新しい（読みを示す仮名書きの初出は，それぞれ，室町中期と江戸中期）。
- (d) [語形・語義]「おんせい」に独自の意味として，《言語音》がある（初出は明治初期）。

以下，これらについて，資料を確認しながら，「音声」の語史を見てい

く。先取りして、上を補っておくと、(b)については、「音声」は、奈良時代の資料にすでに見え、(c)については、平安～鎌倉時代に成立した文献に「おんじやう」という読みが見える。「音声」は、古代から、「おんじやう」と読まれ、《(人の)声》と《楽器の音》という意味で使われていたようである。また、(d)については、明治初期の資料に《言語音》を表す「おんじやう」も見られるが、「おんせい」が優勢であったようである。

3.1 一般語としての語義

「音声」は、古くから、主に《(人の)声》と《楽器の音》の意味で使われてきた。これらは、この語とともに中国から伝わったものである。

中国における最大規模の国語辞典である『漢語大詞典』（上海辞書出版社1986-1993）では、「音声」の意味として、「①楽音；音楽。」と「②泛指声音。」（広く声・音を指す）の2つを挙げている。①の用例としては、『日本国語大』と同じ『周礼』（戦国時代末頃成立か）「地官・鼓人」の「鼓人掌教六鼓四金之音声」（鼓人、六鼓四金（鼓楽）の音声を教えることを掌^{つかさど}る）が、最初に挙げられており、②の用例としては、『列子』（魏晋頃成立か）「楊朱」の「夫耳之所欲聞者音声，而不得聽者，謂之閉聽。」（それ耳の聞かんと欲する所のものは音声（美声），しかも聴くを得ざるもの、これを聴を閉^いづと謂う）が、最初に挙げられている。中国でも、「音声」は、主に《楽器の音》と《(人の)声》を表したようである。

この「音声」の2つの意味は、日本では、ともに奈良時代から使われている。たとえば、「正倉院文書」に次のような例が見られる（「東京大学史料編纂所データベース」の「正倉院文書マルチ支援データベース」を利用した。下線は筆者。以下同じ）。

(10) 中宮職移 皇后宮職 合音声舍人壹拾貳人（「中宮職移案」天平1（743）年7月12日「続々修26ノ3断簡（1）裏」）

(11) 舍人參拾參人 廿一人供養礼仏 三人音声所（「写書所食口案」）

天平勝宝4(752)年「続修別集24断簡1(2)」)

これらの「音声」は、《楽器の音》や《音楽》を表していると思われ、ここから、奈良時代に音楽を担当する官人がいたことがうかがえる。

また、『日本書紀』、『常陸国風土記』に、次の例が見える(ジャパナレッジ「日本古典文学全集」の「古典本文」検索を利用した。本文、読み方等は、『新編 日本古典文学全集』(小学館)による(各作品が成立した当初において「音声」がどのように読まれたかは必ずしもはっきりしないため、ここでは表記形としての「音声」を扱う)。以下、同全集からの引用については同様)。

- (12) 昼ひる蠅さばへ音おと声なひ(『常陸国風土記』(718頃成立)『新編日本古典文学全集5 風土記』1997: 390-391)
- (13) 今楽府奏いま此歌こ者うた、猶有なほ二手量大小たはかり、及音声巨細おほちひさ。(今しこうたまひのつかさふとこふと府に此の歌を奏ふには、猶し手量の大き小きと、音声の巨こき細ふときと有り)(『日本書紀 卷第三』(720成立)『新編 日本古典文学全集2 日本書紀①』1994: 208-209)

例12の「音声」は《蠅の出す音》、例13の「音声」は《歌声》(『日本書紀 卷第三』北野本訓(室町後期写)は「ウタゴエ」(『日本国語大』「うたごえ(歌声・音声)」))である。

これ以降の古典文学作品において、「音声」は、主に《人の声》と《楽器の音》の意味で使われている。

- (14) 和泉国海中有二楽器之音いづみのくに声こ。(和泉国の海中にして楽器の音こ声な有りき)(『日本国現報善悪靈異記 上卷』(822頃成立)『新編 日本古典文学全集10 日本霊異記』1995: 39, 44)(例08参照)
- (15) 音おむじやう声よ吉そキよ僧あつヲ呼あつビ集あつメテ(『今昔物語集 卷第十五』(1120以降成立)『新編 日本古典文学全集36 今昔物語集②』2000: 105)
- (16) すなはち微妙みめうの音おんじやう声いを出いだして(『十訓抄』(1252成立)『新編 日本古典文学全集51 十訓抄』1997: 140)

- (17) 法界等流のほふかいとうる おんじやう しんこんめうう もんじ音声, 真言妙有の文字なり。(『沙石集』(1283 成立)
『新編 日本古典文学全集 52 沙石集』2001: 218)
- (18) 音声は尽くる事なくして, 舌はなほ存せり(『太平記 卷第十八』(1368-1375 頃成立)『新編 日本古典文学全集 55 太平記②』1996: 484)
- (19) 音声のおんじやう きよくもん曲文, 時の調子に移り合ひて(『拾玉得花』(1428 成立)
『新編 日本古典文学全集 88 連歌論集・能楽論集・俳論集』2001: 374)
- (20) 舞曲のぶきよく びどう てがひ こてふ ぐわんこうじ きくわか美童, 手貝の胡蝶, 元興寺の菊若, この二人同年にして, 音声そろひ(『新可笑記 卷一』(1688 刊)『新編 日本古典文学全集 69 井原西鶴集④』2000: 473)
- (21) 上手に申す念仏のおんじやう音声(『独ごと』(1718 刊)『新編 日本古典文学全集 72 近世俳句俳文集』2001: 448)
- (22) いつにかはこころよ ね快き音の出でければ, 何となく心いさみしておんせい音声に心をとめて想ふやう(『英草子 第二卷』(1749 刊)『新編 日本古典文学全集 78 英草子・西山物語・雨月物語・春雨物語』1995: 50)
- (23) 相貌かほばせこはごまみのたけ音声身材まで(『新局玉石童子訓 第五版』(1829-1832 刊)
『新編 日本古典文学全集 85 近世説美少年録③』2001: 488)

以上のうち, 例 14・22 の「音声」は《楽器の音》であるが, その他の例の「音声」は, 《人の声》(とくに, 聞かせる声, 美しい声)を表している。このうち, 例 19 は《謡の声》, 例 20 は《歌声》である。次の, 天草版『伊曾保物語』にある例なども, 聞かせるための《声》であろう(「日本語史研究用テキストデータ集」, 「天草版『伊曾保物語』画像」による)。

- (24) vonjōga isasaca fanagoyede aqiracani naito mōsuga, macotoya conogoroua vonjōmo aqiracani natte (音声が些か鼻声で明らかに無いと申すが, 真や此の頃は音声も明らかに成って)(『天草版

伊曾保物語』(1593刊))

ほかに、「音声」を含む複合語も見られる。『日本国語大』には、「いりおんじょう(入音声)」、「おんじょうがく(音声楽)」、「おんじょうにん(音声人)」、「おんじょうよく(音声欲)」、「だいおんじょう(大音声)」、「たいしゅつおんじょう(退出音声)」、「ほんおんじょう(梵音声)」、「まいりおんじょう(参音声・参入音声)」、「まいりおんじょうがく(参音声楽・参入音声楽)」、「まかでおんじょう(罷出音声・退出音声)」、「みょうおんじょう(妙音声)」が見出し語に立てられている。このうち、「音声欲」(きれいな声を人に聞かせたいという欲望)、「梵音声」(清らかでうるわしい声)、「大音声」(大きな音声)、「妙音声」(非常に美しい音声)は、「音声」が「人の声」を表すが、残りは、「参入音声」(雅楽で、楽人・舞人が所定の位置へ着くまでの間に奏する音楽)、「退出音声」(雅楽で、楽人・舞人が退出するときに演奏される音楽)のように、「音声」が「楽器の音」(雅楽)を表している。

このうちのいくつかについて、古典文学作品から例を挙げる。

- (25) ^{ちやうげいし}長慶子を^{まかでおんじやう}退出音声にて遊びて(『紫式部日記』(1010頃成立)
『新編 日本古典文学全集 26 和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』1994: 158)
- (26) ^{まかでおむじやう}退出音声, ^{やすかは}野州川(『栄花物語 卷第十』(1028-1034頃成立)
『新編 日本古典文学全集 31 栄花物語①』1995: 514)
- (27) ^{おんじやうがく}音声楽の声と聞こえ(『夜の寝覚 卷五』(1045-1068頃成立)
『新編 日本古典文学全集 28 夜の寝覚』1996: 492)
- (28) 馬引き寄せ, ゆらりと乗つて, ^{だいおんじやう}大音声をあげて(『保元物語』
(1219-1222頃成立)『新編 日本古典文学全集 41 将門記・陸奥話記・保元物語・平治物語』2002: 297)
- (29) ^{おほん}涅槃経の四句の文, ^{ほんおんじやう}梵音声にて唱ふると(『用明天王職人鑑 第三』(1705初演)『新編 日本古典文学全集 76 近松門左衛門集③』

2000: 110)

以上のうち、「大音声」は、比較的使用頻度が高い。『新編 日本古典文学全集』所収の作品では、江戸時代までの7作品に用例が見られる。「大音声」は、現代語でも使われ、BCCWJで検索（長単位・語彙素「大音声」）した結果には、53件が現れた。

明治に入ると、《言語音》を表す「音声」が現れるようになる。「日本語歴史コーパス」で、明治期の雑誌（検索対象：『明六雑誌』（1874-1875）、『東洋学芸雑誌』（1881-1882）、『国民之友』（1887-1888）、『女学雑誌』（1894-1895）、『太陽』（1895））を検索（短単位・語彙素「音声」）した結果では、『明六雑誌』を除く5種の雑誌に、計43件（24記事）の「音声」が現れ、このうち、16件（4記事）が《言語音》を表す用例であった（『日本語史研究資料』、ジャパンナレッジ「JKBooks 太陽」で本文を確認した）。例を挙げる。

(30) 盖シ仮名ハ、子音ト母音トヲ混合シタルモノニテ、素ト人ノ音声ヲ精密ニ分析シテ作りタルモノニ非レハ（矢田部良吉「羅馬字ヲ以テ日本語ヲ綴ルノ説（一）」『東洋学芸雑誌』第7号1882: 7）

(31) 欧洲の文字は音声を表するものにして、記憶に便なること漢字の比にあらず（三宅雪嶺「漢字の利害」『太陽』第1巻第1号1895: 24）

以上見てきたように、「音声」には、古くから《(人の) 声》と《楽器の音》との2つの意味・用法があったが、《楽器の音》は、使用される領域がほぼ雅楽に限られていた。今日の一般的用法である《言語音》や《技術的に扱う音》は、もう一方の《人の声》から発展したものと思われる。

3.2 一般語としての語形

「音声」は、古くから「おんじやう」（当初の発音は「オムジャウ」であろう）と読まれていたようである。

3.1 項の例（とくに『新編 日本古典文学全集』のもの）を見ると、「音声」にさまざまな読み仮名が付いているが、同全集の「凡例」によると、底本にはない振り仮名（読み方）を編者が補った場合が多いようである。

以下、原本（写本・刊本）に読み方のあるものを見ていく（本項における用例の検索には、ジャパンナレッジ「日本古典文学全集」、JKBooks 群書類従（正・続・続々）、「国立国会図書館デジタルコレクション」、「日本古典文学大系本文データベース」、「ヨミダス歴史館」、「日本語歴史コーパス」などを用い、原本（写本・刊本）の確認には、「新日本古典籍総合データベース」、「国立国会図書館デジタルコレクション」、「ヨミダス歴史館」、「JKBooks 太陽」などを利用した）。

まず、平安時代に成立した作品では、『栄花物語』（1028-30 頃成立）の写本に「おんさう」が見られ、『夜の寝覚』（1045-68 頃成立）の写本に「おんしやう」が見られる。

(32) 塔のうちの二世尊のいたし給ところのおんさり^[ママ]とも思なされ給事かきりなし（梅沢本『栄花物語』13 世紀写）（『日本古典文学大系 76 栄花物語 下』1965: 367 による）

(33) すこしかきあはせたまふはたとへていはんかたなくおんしやうかくのこゑときこえ（『夜寝覚 三』肥前島原松平文庫蔵本、江戸初期写か）

例 32 の「おんさり」は、「おんさう」の誤表記で（宮内庁書陵部蔵本などでは「おんさう」）、「おんさう」の「さ」は、サ行拗音の「直音による把握」（シャ = サ）（沖森 2010: 154）、および、濁音の非明示で、実際の発音は、「オムジャウ（オンジャウ）」であったと思われる。

鎌倉時代の文献では、狛近真『教訓抄』（1233 頃成立）に「ラムシヤウ」が見られ、『吉野吉水院楽書』（『吉野楽書』）（1239 以後成立）に、濁点付きの「オンジャウ」が現れている。

(34) ^{マイリヨムシヤウ}参 音声ノ時。（『教訓抄 卷第七』宮内庁書陵部蔵本、室町時

代写)

- (35) 本ハ^{オンジャウ}音声吹也ト (『吉水楽書』宮内庁書陵部蔵本)

室町時代の早い時期のものでは、一条経嗣『北山行幸記』(『北山殿行幸記』)(1408年頃成立)に「をんしやう」が見られる。また、室町中期の『文明本節用集』(『雑字類書』)には、「ヲン ज्याウ」とある。

- (36) 左右の舞はて、かく人まかてをんしやうをそうして。をの／＼
かく屋に帰り入。(『北山行幸記』国文学研究資料館蔵本)

- (37) ^{ヲン ज्याウ}音声 (「音」の左に、朱筆で「イン」、墨筆で「コエ」, 「ヲト」。
「声」の左に、朱筆で「セイ」、墨筆で「コエ」)(『雑字類書』「ヲ」
「支体門」国立国会図書館蔵本、室町中期写)(例 08 参照)

例 37 の『文明本節用集』は、朱筆で漢音・唐音が、墨筆で呉音・訓が示されているため、「ヲン ज्याウ」(墨筆)は呉音読みで、漢音読みでは「インセイ」となることがわかる。

室町～安土桃山時代の日本語語彙を大量に収録した『日葡辞書』には、「Vonjö (ヲン ज्याウ)」のほかに、「Inxei (インセイ)」, 「Inxö (インシャウ)」が見られ、このころ、さまざまな語形が現れていたようすがうかがえる。

- (38) Inxei, l. Inxö. Coye. *Vozes*. (インセイ, または, インシャウ (音声). Coye. (声) 声.) (『日葡辞書』オックスフォード大学ボードレイアン図書館蔵本 1603-04 刊 (『キリシタン版 日葡辞書 カラー影印版』2013 勉誠出版), () 内の日本語訳は『邦訳日葡辞書』1980 による)

江戸時代になると、「おんじやう」とともに、「おんせい」も見られるようになる。『日本国語大』における「おんせい」の初出例は、歌謡『松の葉』(1703 刊)であるが(例 09), 同書を含め、刊本の例をいくつか挙げておく。例 43 では、同じ話の中に両語形が現れている。

- (39) 念仏の^{おんじやう}音声よく^{かね}鐘を打により (『露がはなし』元禄 4 (1691))

年刊本)

- (40) 音声しめやかにして調子はひゝきかたよし (『うた本 松の葉』
元禄 16 (1703) 年刊本)
- (41) (=22) いつにかは快こゝろよきね音の出れば何となく心いさみして
音声に心をとめて想おもふやう (『古今奇談 英草子 第二卷』寛延
2 (1749) 年刊本)
- (42) 音信。-頭。一声。(『早引大節用集福寿蔵』「四を」明和 8
(1771) 年刊)
- (43) 長唄おんじやうめりやすなどはすん音せい声おんが清で。はなはだ清音せいおんだからいゝ。瞽
女ぜぶし節せつをはじめとして。すべての田舎唄ゐなかつたは。濁音だくおんで音せい声おんがだみてゐ
やす。(『浮世風呂 四篇下』文化 6-10 (1809-1813) 年刊本) (例
09 参照)

明治以降は、「おんせい」が優勢になる。山田美妙『日本大辞書』(1893)に「おんせい…今多ク普通ニツカフ」(例 44)とあるが、『読売新聞』(1874 創刊)、『女学雑誌』(1885 創刊)、雑誌『太陽』(1895 創刊)などでも、振り仮名付きの「音声」は、ほぼ「おんせい」である。「ヨミダス歴史館」の検索結果では、明治期の『読売新聞』の振り仮名付きの「音声」18 件のうち、17 件が「おんせい」であった(1 例は「おんじやう」)。「日本語歴史コーパス」の検索結果では、『女学雑誌』(1894-1895)の振り仮名付きの「音声」は 2 件とも「おんせい」であり、『太陽』(1895, 1901, 1909, 1917, 1925)の振り仮名付きの「音声」(「大音声」2 件を除く)は、全 11 件のうち、9 件が「おんせい」であった(残りは「おんじやう」と「こゑ」)。

- (44) おんせい (音声) おんじやうトオナジ語。今多ク普通ニツカフ。(山田美妙『日本大辞書』1893)
- (45) 音声試おんせいしためのた為みやうめご明後日同館中にちどうくわんちゆうにて管弦くわんげんをもよ催もよはされます (『読売新聞』1880/11/26)

- (46) 演説^{えんぜつ}を為^なすにも斯^かく鼻^{はな}より空^{くう}気^きを吸^{きう}入^{にう}し腹^{ふく}部^ぶより声^{こゑ}を發^{はつ}せば其^{その}
音^{おん}声^{せい}能^よく徹^{てつ}して疲^ひ勞^{ろう}も少^{すく}しと云^いふ（細谷吉次「心身健全の一事」
『女学雑誌』第416号1895:20）

- (47) 大豪傑^{だいこうけつ}の桂小五郎^{くわいろう}の事^{こと}なれば、其^{その}軀^く幹^{かん}は魁^{くわい}偉^ゐならん、其^{その}音^{おん}声^{せい}は
鐘^{かね}の響^{ひび}くが如^{ごと}くならん（福地源一郎「維新の元勳」『太陽』第1
卷第4号1895:31）

《言語音》を表す「音声」も、ほぼ「おんせい」と読まれたようであるが、「おんじやう」の例も見られる。

- (48) 音^{おん}声^{せい}と言^{げん}語^ごと一^{いつ}致^ちする事^{こと}になり（川田剛「東京学士会院講演傍
聴筆記 日本普通文字は将来如何になり行くか」『読売新聞』
1886/11/23）

- (49) さて人^{ひと}の音^{おん}声^{せい}の基^{もと}は清^{せい}音^{おん}四^し十^{じゅう}七^{しち}と濁^{だん}音^{おん}二^に十^{じゅう}と鼻^び音^{おん}一^{いつ}となり（大
槻修二『小学日本文典 上』1881:2オ）

なお、明治初期の文献には、「いんせい」も見られる。

- (50) 音^{おん}声^{せい}（左^さ振^{しん}り^り仮^か名^な「インセイ」）（土屋政朝抄訳『訓蒙窮理余談
上』1872:14ウ）

- (51) 音^{おん}声^{せい}反^{はん}射^{しゃ} コエガハネカヘル（井東猪之助抄録『物理階梯字
引』1876:24オ）

- (52) 動^{どう}物^{ぶつ}音^{おん}声^{せい}訳^{やく}語^ご（「雑録」『团团珍聞』第115号1879:1837）

「いんせい」は、漢音読みであり、正当な読み方としてつけられたものと思われるが、定着しなかったようである。

以上から、「音声」の語形は、古くは「オンジャウ」であったが、江戸中期に「オンセイ」という形が現れ、明治以降、「オンセイ」が一般的になったことがわかる。

3.3 専門語としての概念

明治以降、「音声」は《言語音》を表すことが多くなる。とくに語学書

などには、「音声」が《単位音（個別音・分節音）》を表す例が見られるようになる。「音声」が《単位音》を表す例を挙げる（この項の用例は、「国立国会図書館デジタルコレクション」, 「次世代デジタルライブラリー」, 「古典籍総合データベース」などによる）。

- (53) 伊呂波四十七字ノ、音声相通ズル者ヲ類別シ、之ヲ縦横ニ排列シタル者ヲ、五十音ト云フ（中根淑『日本文典 上巻』1876: 17オ）
- (54) 伊呂波トハ日本ノ音ニシテ今日々々人類ノ相集シ森羅万象ノ言語ヲ通ハスルト雖 其音声ハ纔カニ四十七ニ止マル 即チ伊呂波四十七ニシテ其字数モ四十七アリ（藤井惟勉『日本文法書 上』1877: 2オ）

例 53 の「音声」は、単音（子音・母音）ととれる。例 54 の「音声」は、音節（モーラ）であり、いずれも、日本語の単位音を表している。

明治初期の日本文典（日本語文法書）には、《単位音》を表すのに、「音」、「音韻」、「音声」、「声音」などが使われている。これは、日本語の音（や文字）の説明をするのに、江戸時代以前から使われていた用語を用いたものであろう（後述）。日本文典における音や文字の説明は、西洋文典（英文典など）にならったものとされる。たとえば、中根淑『日本文典』（例 53）に影響を与えた（古田東朔 2010: 179）とされる開成所翻刻『英吉利文典』（1866 刊）には、「PART II ORTHOGRAPHY」に、「VOWELS」や「CONSONANTS」などの「SOUNDS OF LETTERS」が載せられている。

ところで、今日の言語学・音声学における専門語としての「音声」は、英語の (speech) sound に当たる。『学術用語集 言語学編』（日本学術振興会／丸善 1997）には、「音声 sound」, 「言語音 speech sound」, 「sound 音声」, 「speech sound 言語音」とある。『言語学大辞典 第 6 巻 術語編』（三省堂 1996）や『日本語大事典』（朝倉書店 2014）などでは、「音声」は

「speech sound」となっている。

- (55) 音声（おんせい） 英 speech sound, 仏 son du langage, 独 Sprachlaut 《音声》 日本語の音声という用語は人間が話し言葉で用いる媒体を総体的にとらえ、かつ、その物理的な面に注目した場合の名称である。音声に対して、その個々の要素という意味では音（おん）（phone）を、また、その体系と機能に注目して抽象的に考える場合には音韻（phoneme）という用語を用いる。（『言語学大辞典 第6巻 術語編』「音声」）

Oxford English Dictionary (modified version published online September 2022) によれば、英語の sound は、ラテン語の sonum (sonus (音) の対格) が語源で、sound が《言語音》(The auditory effect produced by the operation of the human voice; utterance, speech, or one of the separate articulations of which this is composed.) を表す用例は、14世紀に現れる。その最初の用例は、R. ヒグデン (Higden) 著、J. トレビサ (Trevisa) 訳『ポリクロン (Polychron)』(年代記) (1385 訳) で、中期英語の「sown」が、英語の多様な《音》を表すのに使われている。《単位音 (単音)》を表す例は、19世紀に現れている。

日本語の「音声」も、これと同様に、《言語音》を表す用法から、《単位音》を表す用法が生まれ、言語学における sound の概念を表す語として、使われるようになったと思われる。

明治初期、「音声」は、物理学、生理学、演説などの分野でも使われている。たとえば、次のような例がある。

- (56) 音声ヨリハ快キコト九十万倍ナリ（「音声」の左振り仮名「コへ」）(吉田賢輔解『格物入門和解 火学之部 下』1870: 2 オ)
- (57) 水ハ空気ヨリ能ク音声ヲ移通ス（関口開『算法窮理問答 下篇』1874: 44 オ）
- (58) 調声帯ノ顫動ヲ起シ以テ音声ヲ発スルナリ（松山棟菴・森下岩

楠沢『初学人身窮理 二』1876: 2オ)

- (59) 音声ノ微弱ナルハ練習ノ方法其宜キヲ得ハ之ヲ改良スルコトヲ得ヘシ (栗原亮一訳『泰西名家 演説集 附演説法』1879: 40)

今日の《技術的に扱う音》を表す「音声」は、物理学における「音声」(例 50・51・56・57)を継承するものであろう。

なお、今日「音声学」と訳される phonetics は、日本では、明治中期以降に研究が始まり、当初は、「音韻学」、「発音学」、「声音学」などとも訳されたが、昭和初期に「音声学」で定着した(阿久津 2018a: 42)。「音声学」は、明治中期には、acoustics (音響学)の訳語にも使われている(『工部省達全書 第二号』1883: 77)。

3.4 専門語としての名称

明治初期～中期の日本文典では、《言語音》、とくに《単位音》を表すのに、「音」、「音韻」、「音声」、「声音」などが使われている。これらは、いずれも中国起源の語であるが、西洋由来の orthography (正書法)、phonetics (音声学)、phonology (音韻論)などの分野で、音概念を表すのに使われるようになっていく。pronunciation に当てた「発音」という語も使われるようになった(阿久津 2022a: 12)。

- (60) 此五十ノ音標字ヲ用テ呼ブ所ノ声音ハ其数五十個ニシテ母音アリ子音アリ (物集高見『初学日本文典 卷之上』1878: 1ウ)
- (61) 此五十ノ音韻ハ縦横ニ通ジ万変ニ応ズルモ各其格ニ従テ混乱錯雑スルコトナシ (同書7ウ)
- (62) 豎ノ音ハ豎ノ音ト通ジ横ノ韻ハ横ノ韻ト通ジテ其例格ヲ乱ルコト無キ者ハ蓋我国ノ音声ノ妙用ナリ (同書12オ)
- (63) 母音 アイウエオの五音を母音といふ。これは、単純なる声音にして、之を永く発音するも、其音声の変はることなきものなり。(高津鋹三郎『日本中文典』1891: 10)

上の例からは、「音韻」, 「音声」, 「声音」が同じような意味で使われていることがわかる。

このうち、「音声」は、これまで見てきたように、古くから一般語として使われてきた語である。「音韻」は、言語音の体系・要素を表す伝統的な用語であり、「音」も、広義・狭義の言語音を表すのに使われてきた(阿久津 2019)。

「声音」は、2.2 項で述べたように、中国語ではよく使われる語であるが、日本ではあまり使われてこなかったようである。「声音」は、『日本国語大』には、『今昔物語集』のほか、江戸時代の例などが挙げられているが(「せいおん(声音)」, 「せいいん(声音)」), 「日本語歴史コーパス」の検索(短単位・語彙素「声音」)結果には、奈良~江戸時代の用例は現れなかった(「こはね」は3件現れた)。

明治期に「声音」が使われるようになったのには、当時参照されていた中国の英華字典の影響などもあるのかもしれない。モリソン英華字典(1822 刊), ウィリアムス『英華韻府歴階』(1844 刊), メドハースト英華字典(1847~1848 刊), ドーリットル『英華萃林韻府』(1872 刊)に、sound の対訳として、「声音」が挙げられている(「英華字典資料庫」による)。

明治後期~大正期には、「声音」は、このころ盛んになった phonetics (声音学)における音概念を表すのに使われるようになった(阿久津 2018b: 351)。

(64) 氣息が声管即ち胸腔・口頭腔・咽頭腔・口腔・鼻腔を通ずるに因って生ずる響を声音と云ふ。(白田寿恵吉『日本口語法精義』1909: 9)

(65) 文法学は其の一部に於て声音を講ずるから声音学を含むものではあるが、文法学は声音を言語から離さずに言語の形骸として研究する。(松下大三郎『標準日本文法』1924: 5)

その後、昭和初期に、言語音の研究が phonology と phonetics とにはっ

きり分かれ、それぞれが、「音韻論」, 「音声学」という名称で定着してくると、音声学の音概念には、「声音」よりも「音声」が使われるようになる。

(66) 此の会は純粋に音声の学的研究を目的とするものであって
(「申し合せ」『音声学協会会報』第1号1926:1)

(67) 「音声」即ち発音運動の外形は、話手が心に抱いている理想即ち「音韻」によつて意味づけられる。(有坂秀世「音韻に関する卑見」『音声学協会会報』第35号1935:9)

phonology と phonetics とを、いち早く「音韻論」と「音声学」とに呼び分けたのは、金田一京助のようである(スウィート1912:41)。金田一は、「音声と音韻と、吾人はこの二つの名辞を所有する」(金田一1928:520)と述べているが、「音声」と「音韻」には、古くから使い分けがあったようである。これについて、両語がともに現れる、江戸時代の文献の用例から見ておく(この項の用例は、「国立国会図書館デジタルコレクション」, 「新日本古典籍総合データベース」などによる)。

(68) 弥陀の六字に大道の陸地を付合せ吉野の葛を厩屋の軒に取成す
事は仮名に書ても音韻に呼ても聞えぬ事なり 誠に端箸橋など、
て音声の高低自由なる都人の此四ツの音ばかりを言得ざらん事
は最口惜き事也(鴨東嶽父『仮名文字使 蜷縮涼鼓集 上』「凡例」
元禄8(1695)年刊本)(アクセントを示す記号は省略した)

(69) 音韻トハ人ノ音声ナレハ其口ヨリ出テ耳ニ聞クヘキ者ニシテ形
ナケレハ図画ニモ写スヘキヤウナキヲ四声七音ヲ経緯ニシ二百六
韻ヲ収メテ漏ルコトナク音ノ是非ヲ知ラシメタルハ妙ニシテ妙ナル
寔ニ珍敬スヘキノ書ナリ(文雄『磨光韻鏡後篇 指要録』「韻鏡
大旨」明和9(1772)年序, 安永3(1774)年跋刊本)

(70) 殊に音韻言語は。太古より毎国^{クニゴト}となへ来たりし者なるを。我
国には。西土の字を仮て。音を習ふには。一旦彼土^{クニ}の音声^{ウツ}に転る
が如くすれど。はた年を歴ては。我音声に移るべき事。自然の理

也。(上田秋成『靈語通』「仮字編」寛政7(1795)年序刊本)

- (71) 音韻ノコト, 古来云フ者, 多シト雖モ, 皆一方ノ私言ニシテ, 世界同一ノ公論ニ非ズ, ^{ソモハ}夫 活物ニ, 音声アルコト, 何レノ国ニテモ, 同一ノコトニシテ, 此ノ国ニ限り, 此ノ地ニ限りテ, 無シト云フコト, 有ルベカラズ, (鳥海松亭『音韻啓蒙』文化13(1816)年刊本)

また、「音声」ではなく、「声音」が使われた例もある。

- (72) 西歐諸国の如きは方俗音韻の学を相尚ひて其文字のときは尚ふ所にあらず 僅に三十余字を結ひて天下の音を尽しぬれば其声音も又なを多からざる事を得へからず (新井白石『東雅』「総論」享保2(1717)年成立, 同4年序, 酒田市立光丘文庫蔵写本)
- (73) 阿蘭陀ノ声音我国ト大ヒニ異ナレハ阿蘭陀文字寄合ノ委キヲ阿蘭陀人へ尋問スレトモ口授ヲ專ラトシテ筆記スルコトアタハス (青木昆陽『和蘭話訳』寛保3(1743)年序, 国立国会図書館蔵写本)

以上の例からは、「音声」(あるいは「声音」)は、自然に発せられる音(声)であり、「音韻」は、体系的にとらえた言語の音である、というような違いがうかがえる。「音韻」は、「音+韻」(五十音図の「行+段」)であり、分析・総合された言語音というニュアンスがあったものと思われる。例68・69・70・72には「音」も現れているが、これらの「音」は《個別音》を表しているようである。こういった語が、明治に引き継がれていった。

明治期には、新しい概念を担う語(翻訳語)が多く現れたが、翻訳語には、旧来の語を使う場合と、新たな語をつくる場合とがあった。旧来の語を用いる場合にも、旧来の語そのままではなく、(ア)読み方を変えたり(飛田1992: 340)、(イ)字順を変えたりして(竹中1988: 63)、多少の変更を加えるというやり方もあった。「音声」と「声音」に関していえば、

「音声（おんせい）」は（ア）に当たり（「おんじやう」→「おんせい」）、「声音」は（イ）に当たる（「音声」→「声音」）。この場合は、結果的に、（ア）の「音声（おんせい）」が残ったわけである。

なお、「音声」と「声音」のうち、日本で古くから「音声」が優勢であった理由は、はっきりしないが、あるいは、日本語では、中川（2013: 176）のいう「母音優先の原理」（構成要素のうち、母音で始まるものが前にくる）によって、「音声」（「おん」+「じやう」, 「おん」+「せい」）が好まれたということがあるのかもしれない。

4. おわりに

これまで見てきた「音声」の語史をまとめておく。

- (A) 現代日本語の「音声」は、《技術的に扱う音》を表すことが多い。
- (B) 「音声」には、奈良時代から、《(人の) 声》や《楽器の音》を表す用法があった。
- (C) 「音声」は、古くから（少なくとも平安時代には）「おんじやう」と読まれたが、江戸時代に「おんせい」という読みが生まれ、明治以降、「おんせい」が一般的になった。
- (D) 「音声」は、明治以降、《言語音》、とくに《単位音》を表すのに使われることが多くなった。
- (E) 《言語音》を表す用語には、明治期に、「音韻」, 「音声」, 「声音」などが使われたが、昭和初期以降、主に、音韻論における音概念には「音韻」が、音声学における音概念には「音声」が使われるようになった。

参考文献

阿久津智（2018a）「音韻論」と「音声学」の語誌『立教大学日本語研究』25

- 立教大学日本語研究会 35-53
- 阿久津智 (2018b) 「明治後期・大正期の口語文典における音韻」 沖森卓也編『歴史言語学の射程』三省堂 341-353
- 阿久津智 (2019) 「音」と「音韻」『立教大学日本文学』121 立教大学日本文学会 233-247
- 阿久津智 (2022a) 「発音」という語について『拓殖大学 語学研究』146 拓殖大学言語文化研究所 1-26
- 阿久津智 (2022b) 「発声」という語について『拓殖大学日本語教育研究』7 拓殖大学日本語教育研究所 103-125
- 阿久津智 (2022c) 「専門語の語史研究の方法」『拓殖大学 語学研究』147 拓殖大学言語文化研究所 1-24
- 沖森卓也 (2010) 『はじめて読む日本語の歴史：うつりゆく音韻・文字・語彙・文法』ベレ出版
- 金田一京助 (1928) 「言語学原論を読む」『民族』3-3 民族発行所 519-521
- ヘンリ・スウィート, 金田一京助訳 (1912) 『新言語学』(原著 1900)
- 竹中憲一 (1988) 「中国語と日本語における字順の逆転現象」『日本語学』7-2 明治書院 55-64
- 中川正之 (2010) 「現代日本語における漢語と現代中国語：並列語(リンク語)・類縁語をめぐって」『立命館文学』615 立命館大学 598-587
- 中川正之 (2013) 『漢語からみえる世界と世間：日本語と中国語はどこでずれるか』岩波書店(初刊 2005)
- 飛田良文 (1992) 「漢音呉音の交替現象」『東京語成立の研究』東京堂出版 325-342 (初出 1968)
- 古田東朔 (2010) 「日本文典に及ぼした洋文典の影響：特に明治前期における」『古田東朔近現代日本語生成史コレクション 第4巻 日本語近代への歩み』くろしお出版(初出 1958)
- 馬雲 (2017) 「現代日本語における字順逆転する二字漢語 AB・BA について：現代中国語に一方が欠落しているもの」『言語の研究』3 首都大学東京言語研究会 61-76

【使用データベース類】 (いずれも最終閲覧は、2022年10月)

「英華字典資料庫」中央研究院近代史研究所

<https://mhdb.mh.sinica.edu.tw/dictionary/>

「Oxford English Dictionary (オックスフォード英語辞典)」Oxford University Press

- <https://www.oed.com/>
「現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言」国立国語研究所
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/>
- 「コーパス検索アプリケーション 中納言」国立国語研究所
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>
- 「国立国会図書館デジタルコレクション」国立国会図書館
<https://dl.ndl.go.jp/>
- 「古典籍総合データベース」早稲田大学図書館
<https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>
- 「CCL 語料庫」北京大学中国語学研究中心
http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/
- 「次世代デジタルライブラリー」国立国会図書館
<https://lab.ndl.go.jp/dl/>
- 「ジャパンナレッジ」ジャパンナレッジ
<http://japanknowledge.com>
- 「新日本古典籍総合データベース」国文学研究資料館
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/>
- 「大英博物館所蔵 天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』画像」国立国語研究所
https://dglb01.ninjal.ac.jp/BL_amakusa/
- 「東京大学史料編纂所 データベース検索」東京大学史料編纂所
<https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/>
- 「日本古典文学大系本文データベース」国文学研究資料館
<http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/>
- 「日本語史研究資料」国立国語研究所
<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjald/>
- 「日本語史研究用テキストデータ集」国立国語研究所
https://www2.ninjal.ac.jp/textdb_dataset/amis/amis-k-001.html
- 「日本語歴史コーパス」国立国語研究所
<https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/>
- 「ヨミダス歴史館」読売新聞
<https://database.yomiuri.co.jp/about/rekishikan/>